第二十二回ふくふく童話大賞　「　奨励賞　」

「ねじれ耳洋平の物語」

おじいは、島一番の漁師で、魚をいっぱいとってきては、困っている人たちにわけあたえていました。

「きょうは、一匹もつれんかったな」

おじいが重い足どりで家へ向かっている時でした。どこからか「オギャー、オギャー！」と赤ちゃんの泣き声がしてきました。

「おや、これは？」とおじいが辺りを見まわすと、アダンの根もとに赤ちゃんが置き去りにされています。

「あぁ、これは天からのさずかり物だ！」

おじいは赤ちゃんを抱き上げると、喜び勇んで家へと急ぎました。

「おばぁ、ほら、きょうは大物さー」

おじいの大声に、おばぁは何事かと、外へ飛び出していきました。

「まぁ。元気そうな赤ちゃん」
おばぁは、大声で泣きわめく赤ちゃんを抱きかかえ「ヘイヨーヘイ」とあやしました。
「ああ、かわいそうに……。この子、耳がへんさ。ねじれているさ」
「なーに、大丈夫。大丈夫。子だくさんで育てきれなくなってすてられたまでさ」

おじいとおばぁは、赤ちゃんに、おじいのように強くたくましい漁師になるようにと「洋平」と名づけてかわいがりました。洋平は日に日に大きくなり、見るからに男の子らしくなりました。
だが、洋平は、村の子どもたちから「やーい。ミミグァー洋平（ねじれ耳の洋平）」とからかわれ、仲間はずれにされてしまいました。
洋平は、そのたびにくやしがって、ねじれた耳を引っぱってなおそうとするのでした。
そんな洋平を見るにつけおじい、おばぁは胸がしめつけられるような思いがしました。
「ね、洋平。強くなるんよ。そしていいことして、いまに見かえしてやるんさね」と、

おばぁは、洋平に言いきかせていました。

やがて、洋平は、おじいの片腕になるほどの頼もしい若ものになり、おじいといっしょにサバニ（小舟）にのって漁へ出かけました。

そんなある日、はるか沖合いからクジラの大群が高波をあげてやってきます。

「あれ？　おじい。ほ柱を立てているクジラがいるさ」

「ええ？　ほ柱？」

クジラの大群は、見る見るうちに近づいてきました。ほ柱ではなく、鉄のモリのようなものが、子クジラの背中につきささっているみたいです。

「ああ、大変！　モリだ。モリだ！」

洋平は、あわててサバニから荒波へ飛び込み、子クジラの背中へよじのぼりました。

「いいか、がまんだ！　がまんだぞ！」

洋平は、モリを抜いてやろうと必死に声をかけました。クジラは、痛そうにのたうち

まわり、あばれまわりました。
さすがの洋平もモリを抜き終えた時には、力つきて海へふり落とされてしまいました。
それを見ていたおじいは、「洋平！　洋平！」と、まるで気が狂ったように叫びながら血に染まった海を探しまわりました。しかし、どんなに探しても洋平の姿は、見つかりませんでした。
それでもおじいは、くる日もくる日も海へ出かけていって洋平を探し続けていました。

クジラにふり落とされた洋平は、波にのまれ、海流にながされ、気を失ったまま、とある島に流れ着いていました。
「ふん。こいつは漁師ではない。耳はねじれ、体のあちこちには格闘のきずあとがある。きっと、どこかの海ぞく野郎だ」
島の見張り人にそう決めつけられた洋平は、島の洞くつのろう獄へ引きずられていき

ました。

くたくたに疲れはてた洋平は、うす暗く冷たいろう獄の土の上にねかされて死人のように眠り続けました。

そんな洋平の顔面に、時々、ポタリポタリと洞くつからのしずくが落ちてきました。

ハッとしたその時、洋平の耳もとへ洞くつの奥の方からおごそかな声がしてきました。

「わしゃ、この島の神じゃ。いま、この島は長い干ばつで危機にあえいでいる。これを救うには、おまえさんのそのねじれた耳の力をかりなくてはならないのじゃ。

それで、さっそく今夜から、おまえさんをここから出すことにする。それからは、ホタルが導いていく。おまえさんは、それに従うのじゃ。いいな」

その日の夜中、洋平は、島の神に告げられたようにろう獄から外へ出されました。

ちょうどその時分、見張人は、何かろう獄の扉が開けられるような気配を感じました。

「おや、これはいま時、何事か。ひょっとしたら脱獄でもはかろうとしているものが？

それともこの島をおそおうと近くの海ぞくどもが下調べでもしているのでは？」と、あやしく思った見張人は、すぐろう獄へかけつけました。

ところが、ろう獄の扉は閉ざされたままでなんの変わった様子も見られません。それでも見張人は周辺をきびしくみまわりましたが、なんの不審な人かげも見当たりません。

なお疑いを抱いていた見張人はろう獄の中のすみずみまで点検しました。

「おや？　悪党野郎の姿がない。そこいらに確かにねむっているはずなのに……。あいつめ、どこへ消えうせたのか？」

びっくりした見張人は、自分の目を疑って、昼間、もう一度ろう獄へ点検にいきました。

すると、なんとそこには、洋平がぐったりとねむっているではありませんか。

「うーん、これはいったいどういうことか？」

ますますふしぎに思った見張人は、この者の正体をつきとめようと、あれこれ策を

考えました。そこで、ふと頭に浮かんだのがこの島の岩場にすんでいる怪鳥のことでした。

怪鳥は、産卵期になると、ほかのものどもに自分のとりでをあらされまいようにと巣のまわりにフンをまき散らしていました。そのにおいときたら、とてもきつくてなにものも寄せつけないほどでした。

見張人は、この怪鳥のフンをかき集めて、昼間ぐったりと寝いっている洋平の服のすそへすりつけておくことにしました。

その夜、またしても真夜中ごろに、ろう獄の扉がキーと開けられるような音がしました。「よーしっ」とばかりに見張人は、とび出していきました。

ひどいにおいを放ちながら、たくさんのホタルに導かれてろう獄を出ていくものの姿があります。どこへ行くのだろう。見張人は息をころしてその後をつけていきました。

しばらくいくと、ホタルの群れの動きが止まり、そのものの動きもとまりました。

それからその人かげは、足もとの草むらをかきわけ、ねじれた耳を地面にこすりつける奇妙なしぐさをしはじめました。

何かを聞き分けようとしているようでした。

やがて、それを聞き当てたのか、そこを一気に堀りはじめました。

すると、そこから水が、水柱のように吹き上がりました。水脈を探りあてたのです。

「あっ！　悪党野郎だ！」

驚き、声をあげた見張人は、大急ぎで、領主にこのことを報告に行きました。

報告を受けた領主は、すぐに洋平を呼んで言いました。

「おまえさんが泉を探し出してくれたのか。おまえさんは、この島の大恩人だ。わしは、おまえさんに最高の位をさずけたい。そして、なんならわしの最愛の一人娘をあげてもいいのだが」

「領主さま、そのようなだいそれたことまことに身にあまる光栄に存じます。

でも、わたくしごときものが、それをお受けするわけにはいきません」

「では、せめてものわしの気持ちを」と、洋平の前へ財宝の数々が差し出されました。
「それでは、これを一つだけいただきます」
洋平は、その中からほら貝を一つ手に取りました。
「ふーん。ほら貝か…」
ほら貝は、海に生きる漁師たちの誇りにしているもので、島のおじいも見事なほら貝を家宝にして大事にしていました。
「…領主さま。あとひとつだけ、たってのお願いがございます。どうか、サバニをかしてください。自分の島へ帰りたくなりました」

翌日、サバニは、荒波をこえて島に向かっていました。
サバニが洋平の島の岬に近づいた時、とつぜん波間からクジラが現れました。背中に傷あとのあるクジラでした。
クジラは高々と潮をふきながら、洋平のサバニに寄り添うように近づいてきました。

洋平も島の領主にもらったほら貝を、岬のほうへ向かって力いっぱい吹き鳴らしました。

それをききつけて岬へかけつけた島の人たちは、クジラをしたがえた洋平の姿を見つけ、「ミミグァー洋平のお帰りだぞー」と大喜びで叫びました。

島へもどってきた洋平は、さっそくつぎの日からおじいといっしょに漁へでかけようとしていました。

「洋平、きょうは、海、荒れているさ」

おばぁは、心配そうに洋平をひきとめようとしました。

「なーに、平気さ。だって待っている人たちがいるんだもん」

（兼城　賢栄）